

「がん哲学外来」

紹介し意義語る

順天堂大・樋野氏講演

順天堂大医学部病理

・腫瘍学教授で、一般

社団法人がん哲学外来

の樋野興夫理事長が4

日、米子市内で開かれ

たがん医療講演会で

「病気は人生の夏休み」

と題して講演、約30

0人が「言葉の処方箋」

に聞き入った。

がん診療連携拠点病

がん哲学外来の必要性を呼び掛ける樋野理事長は4日、米子コンベンションセンター



院の米子医療センターが主催した。

全国120カ所以上

に広がる「がん哲学外

来」は、医師が患者と

対話し、その休まらな

い心の隙間を埋めることが狙い。

樋野理事長は「日本の医療は、馬の上から花を見ているような状況。馬を下りて患者と同じ目線で花を見ることが大事」と、がん哲学外来の活動を紹介しながら、その意義を述べた。

臨終に際してのカーンの「これでよい」、勝海舟の「これでおしまい」などの言葉を紹介し、「人は最後に死ぬという大切な仕事が残っている。皆さんは準備ができていますか」と問い掛けた。

患者が共感を覚える調。樋野理事長のゆっ「暇げな風貌」と「偉大なるおせっかい」が外來のモットーと強
たりとした話しぶりが会場を和ませた。
(上本康成)

2017年2月5日 日本海新聞